

書評

岩田昌征

『現代社会主義の新地平』

—市場・計画・協議のシステム—

日本評論社 1983.10 vi+387 ページ

わが国における社会主義経済研究が本格化したのは60年代のソ連・東欧の経済改革をめぐる論議が、それまでの集権的計画制度の欠陥を明らかにするようになってからであるが、マルクス主義の影響が強かった日本の社会科学が、社会主義がそれ自体内部に矛盾を含んだ社会であって、理想的な社会、ないしは理想的社会へむけて歩みつつある社会ではない、という認識に達するにはかなりの心理的、思想的抵抗があった。こうして、「前期的社会主義」論がマルクス主義の理念を保存しながら現実を止むをえざるものと認める、方法論的クッションとして生まれたが、その後の経過は社会主義の矛盾の深化を示すものではあれ、生産力の発展に伴って矛盾の解消をもたらすものではなかったから、このフレーム・ワークも次第に色褪せてきた。

これに代って登場したのが、計画経済に市場導入をはかって社会主義を活性化するという「市場導入」論ないしは「計画プラス市場」の最適ミックス志向のフレーム・ワークである。しかし計画それ自身が理想的秩序であるという想定に無理があるように、市場それ自身が最適資源配分を実現するという想定に無理があり、かつ両者の最適ミックスなるものが単なる不整合、混乱に陥る可能性は小さくない。

本書はかかる問題状況を打破し、文字通り現代社会主義論の「新地平」を開拓すべく、伝統的経済学から独立したシステム論的見地に立って、先進資本主義の市場経済およびソ連型計画経済を相対化し、もって社会主義経済の実態、現実の作動様式に迫ろうとするものであるが、全体を展望する視点に著者が長年追究してきたユーゴスラヴィアの自主管理社会主義を据えたところに特徴がある。

本書の構成は、第1章において欧米、ソ連、ユーゴの社会経済体制をそれぞれ市場メカニズム、再分配メカニズム、協議メカニズムの制度化と規定して、三者の独自性を示し、第2章自由・平等・友愛と自主管理社会主義、第3章社会主義へのチトーの道、第4章自主管理連合労働体制の構図、第5章公共財の自主管理、の諸章で70年代ユーゴスラヴィアの分析を行ない、後半は対象をポ

ーランドに転じて、第6章計画経済の構図、第7章計画経済の機能様式、第8章計画当局 versus 企業、第9章計画経済体制の危機と変動、において70年代ポーランドの計画メカニズムと80年代初にかけての危機と連帯運動を分析する。手短かに言えば、本書は、著者の方法なしパラダイムを宣言する第1部、それを実証すべきユーゴ論の第2部、ポーランド論の第3部の3部構成をなしている。

著者の方法論マニフェストである第1部をみよう。

岩田氏は、現存社会主義を未発達、あるべき社会主義に達していない社会制度、とは考えない。それはソ連型とユーゴ型の社会主義に分化し、それぞれに先進資本主義とは異なった独自の、かつ独立した社会システムをなしている。氏はこの3つの社会システムを経済、社会、経営、政治の15の次元から限なく特徴づけ、それぞれ市場メカニズム、計画メカニズム、協議(第3)メカニズムと呼び、フランス革命の自由・平等・友愛のそれぞれに対応させ、経済人類学(ボランニイ)の交換・再分配・互酬のそれぞれに対応させる。氏はこの三者を、おなじみの需要曲線と供給曲線による価格・産出量決定の幾何図形を利用して、それに富者の消費者余剰、優等生産者の超過利潤という社会階層次元の解釈を加えて巧みに説明する。市場メカニズムでは点調整が交換から貧者と劣等生産者を排除し、計画メカニズムでは線調整によって国権を介して富者の消費者余剰、優者の超過利潤が貧者、劣者の補助にまわされ、協議メカニズムでは再調整により国権の媒介なしに当事者間の協議を通して、富者・優者の自発的譲歩=貧者・劣者の人間的存続が保たれる(17~20頁)。この3つの社会システムはそれぞれに、自由と不平等、平等と国権肥大化、友愛と非能率の長所と欠点を内在させつつ並び立つ。社会主義経済はこのフレーム・ワークの下で究明されなくてはならない、と氏は繰返し強調する。

このモデルはいずれも極度の抽象によって構成されているが、氏の創案によるものである。モデルがどこまで現実を説明するかは吟味を要するが、この方法論的宣言に達するには従来の堅固なパラダイムの検討と社会主義の現実把握との往復のたゆみない努力があった筈であり、今日、この努力が実って伝統的経済学のパラダイムから独立した「新地平」に氏が到達したことは、まずもって共に喜びたい。

第2部、ユーゴスラヴィア論に進もう。この各章は70年代中葉における社会的自主管理を目指す連合労働組織の理念と法制、それに公共財自主管理利益共同体 SIZ

の構成の説明を軸にしている。氏の「新地平」がこの国の友愛・互酬・協議メカニズムを楨杆に構成されているから、第2部こそ本書の白眉でなければならない。評者もここに最も多く期待した。しかしながら、率直に言って、この期待ははぐらかされる。

ここには、協議メカニズムで作動している自主管理社会主義の現実には存在しない。あるものは建前であり、理念であり、志向である。だが、社会主義の美辞麗句はたとえユーゴについて聞かされようと食傷しているのである。氏の新しい視座による肝腎のユーゴ現実分析の失敗には、察するに2つの理由がある。その1つは、互酬・協議メカニズムが国有(社会的所有)とプロレタリア独裁の条件の下で成立する特別な困難性を著者が熟慮していない故であり、もう1つは、ユーゴ当局が掲げる理念に著者が入れあげて、その批判的吟味をアレルギー的に拒絶してしまう故である。

互酬は、経済人類学が示すように、原始的な家族制、親族制社会に埋めこまれた経済関係として一般に成立するものであって、近代文明社会では部分的にしか成立しない。とくに不労所得が原理上は排除される社会主義の下では、勤労が唯一の所得源泉となろうから、労働に応じた分配は合理的であろうが、効率的勤労者(富者、優者)が非効率的勤労者(貧者、劣者)に自発的に、ないしは協議によって余剰を引渡す、という事態が普遍的に生じるとは考え難い。実際、ユーゴスラヴィアが50年代以来追求してきた市場制労働者自主管理は市場を介した労働者集団利害の相互衝突の世界を現前させてきた、と私には思えるのであるが、これがどうして70年代半の法制改革、社会的自主管理の単なる規範の設定によって、一転、効率的勤労者の自発的な譲歩に転換しうるのであるか。かくて当然、ユーゴでも協議は公共財供給の狭い部面に限られるのであるが、ここでもSIZの統合には独裁党(共産主義者同盟)の政治調整が作用するのであって、反対派oppositionの抑圧されるところ民衆の真の自発性が関与する余地は限られている。ユーゴを熟知する岩田氏が理念と現実の背離について無知であるとは考えられない。だが、氏はユーゴ内部にある批判的見解(例えばザルコヴィチ Žarkovićの見解、等)はこれを「市場の再強化か、計画化の復権かを志向する」と斥けてしまう(26頁)。計画経済の欠陥を衝く批判を「資本主義復活を志す」と斥け、市場経済の欠点を暴く批判を「共産主義的傾向」と言って斥けたら、社会経済体制の認識にどれだけ冷静な部分が残るのであるか。

逆に第3部ポーランド分析では「新地平」が現実に生

きている。

岩田氏は、計画当局と企業とにある情報の歪曲と多頭多目標の矛盾、企業集団利益の優先の葛藤をシステム論的に分析しつつ、そこに60年代計画メカニズムの分権化による修正とその再集権化による是正の交替を見出し、集権一分権両極の均衡から不均衡への転化、不均衡から均衡への転化の循環を通して、集権指令と分権的パラメータ誘導の2つの異質の計画システムのモザイク模様が制度化される、とする。

だが、70年代後半から80年代初にかけての動揺と危機の分析には、先の高級財における均衡価格以上の高価格=財政赤字による基本財における均衡価格以下の低価格=財政赤字の補助、という計画メカニズムの図式が強力な分析要具となる。このメカニズムは、市場メカニズムの下であれば当然入手できたであろう高級財を入手できない中所得層の欲求不満を強めるが、基本財を安定価格で入手できる低所得層はシステムの当然としてこれを受け容れ、より低価格での基本財の供給増加を期待する。しかしながら、生産における中堅の担い手である中所得層を刺激するために高級財の供給増、基本財の価格引上げを当局が求めると、低所得層は生活権を脅かされて憤激し、それがこれまで累積した中所得層の不満と結合して社会圧力となり、合理化(値上げ)が阻まれ、中堅層の勤労意欲が損なわれ(供給減)、かくて高級財、基本財の両方に供給不足・超過需要が発生し(行列延長)、赤字合計が黒字合計を上まわって動きがとれなくなる(国際債務累増)。基本財の低価格維持を求めながら市場導入を要求する連帯労組の運動は不整合で代替案となりえず、国民は集権=集責任を攻撃しえても、分権=分責任に堪える覚悟は毛頭ない。

このように本書は意欲的な問題作であるのは間違いないが、出来、不出来のアンバランスが著しく、独創的で高水準の研究という評価を受けてもおかしくはないが、裏付の乏しいイデオロギー過剰の書と批難されても不当とは言えまい。だが、著者は、ポーランドの外貨店(内国輸出店)網PEWEXの分析において示されるように、冷静な社会科学者の眼と不正を許さない社会正義の情熱を兼ね備えた研究者である。評者はこの書が研究に「新地平」を拓いた意義を評価しつつ、著者がユーゴスラヴィア、ポーランドの現実のより詳細で骨太い、システム論的再構成にあらためて挑戦されんことを期待してやまない。

[岡田裕之]